

## 多様な映像表現のねらったもの

内田（放送教育開発センター） ディレクターというのは番組を見ていただければそれでよろしいので、いいわけがましいことを申し上げるつもりはないのですが、野沢さんと分担しまして一言二言補足的なご説明をさせていただきます。

テレビの番組、ラジオも含めて放送番組には、いろいろなジャンルがございます。たとえばある種の番組、ドラマといったものは芸術性とか創造性とかいうものが必要不可欠の条件だろうと思いますし、演芸番組でしたが娯楽性が大事だろうし、ニュースとかスポーツ番組なんかでしたら速報性とかニュース性とか、その他の番組でも実用性とか、さまざまな必要不可欠の要素があるろうかと思いますが、教育番組の場合は、教材性ということが何よりも大事だろうと考えております。

つまり、教材性が高いか低いかが教育番組の勝ちを決める。いいかえるならば、学習に役立つか役立たないか、それが教育番組の価値を決める。特に放送大学の番組ということになりますと、学校教育番組でございますので、単なる学習ということではなくて、計画された学習、けらかじめ予定された学習に役立たなければ、番組としていかにすぐれていても、教番組としてはだめだろうと考えました。

この番組の6タイプの場合も、必ずしも、ただ演出的に6つできるということでもつくり分けたいということではありませんで、私たちなりに教材性という面も考えて、しかもそれがきょうの留様方への問題提起になるようにという配慮をしたわけでございます。

そして、教育番組において教材性とは何か、あるいはどんな番組が教材性が高い番組といえるのかふいうことについて、私たちの考えを一言二言だけいわせていただきます。

教材性という面から6つのタイプの＜天国と地獄＞という番組を考えました場合に、普通ですと、教育のねらい、目的というようなこととか、情報をどう選んで、ということを考えます。午前中に映像というものは、情報量が多過ぎるというお話がございました。私も基本的には賛成でございまして、だからこそ講師の

目、ディレクターの目を通して、必要な、最適の映像、情報というものを選んでいかなければならないというふうに考えております。

一言だけ午前のお話に反論させていただきますと、テレガができて30年たちまして、当時小学生だった子供たちもいまや40歳に近づこうとしている中で私たち、あるいは私よりもっと年配の方たちが情報量が多くて目が回るとおっしゃいます中身が、若い40歳以下の人たちにとりましては、情報処理能力というものが想像以上に大変育っておりますので、私たちが目を回すかよ必ずしも情報が多過ぎるということではないだろうということは、1つ押える必要があろうかと思えます。

さて、この6つのタイプの番組のねらいには、大きく分けて2つございます。

先ほどこちと話題が出ましたが、1つは、知識ですとか技術を習得させる、黒板をノートにとらせて、試験にはそのとおり出すというタイプ、こういうのをねらいとした番組。この6本の番組の中では、最初の3本の番組、スタジオ、教室の中継が主としてそれをねらった、いわゆる知識注入型とでもいいですか、そういう番組だと解釈して制作しました。

それに対して、映像の特性をなるべく生かしまして、学習への意欲づけとか動機づけとか方向づけを第一に考えて、見終わった学生たちが自分で学習したい、あるいは中継でしたら、そこへ行って、いわゆるフィールドワークですとかそういう学習をやってみたいという気をお起こさせるような番組づくりをねらったものが後の3本、現場中継及びドキュメンタリーの2本です。

テキスト、台本、講師は同一の方でありますし、どの番組にも、六道、十王思想、八大地獄、最後は地藏菩薩の救いというのをに入れてあります。

そういう制約がありましたのでそれぞれのねらいは必ずしも明確ではありません。Aタイプ、Bタイプという2つは、必ずしも明確に別れるのではなくて、両者の中間、つまりABタイプというのもございます。ABタイプとして6タイプの中で一番考えましたのは、5番目の、柳川先生が自分で解説をなさるドキュメンタリーです。あの演出形式というのは、必要ならばスタジオも使えますし、Aタイプの知識を注入したい場合には、それなりのパターンとか、そういったもの

をいかようにでもたくさん盛り込めますし、A Bタイプにもつくることができると考えております。

たとえば中継なんかでも意識的にそこにあるものしか撮りませんでしたし、そういう意味の割り切り方を、むしろ意図的にいたしました。ごらんいただきましてどれがいいと評価なさるか、それは皆様方、あるいは放送大学を含めた将来の学生さんたちの問題であらうと存じます。

野沢（放送教育開発センター） 私は、番組の形式といえましょうか、入れ物の方から番組を振り返ってみたいと思います。

まず情報の量というものから考えてみてまして、質というふうにまでいかずに、入っている中身の量が多いという点では、スタジオ形式が一番多かったと、客観的に見て思うわけです。あらかじめ非常に計算しやすいということが1つと、もう1つは、スタジオという場は何でもしゃべれる場でもあるからです。

何でもしゃべれない場があるのかというと、現実にはありまして、たとえば中継番組の場合の現場に行きますと、現場の〈場〉というものが語りかけてきますから、そこで何でもかんでもいえるというわけではないのです。あえていえば、非常に寒々しい浮き上がったものになってしまう。〈場〉に拘束されるということがございますから、そういう意味合いからいくと、スタジオ番組が中身はたくさん入る、計算しやすい、そういうことがあったと思います。

それから、今度は中身の方が少ないと思われたものは、教室の中継です。いろんな余談が入る。脱線する。枕とっては失礼ですけども、そういうものも入るでしょうし、したがって情報量そのものも少ない。この点については、先ほど柳川先生もおっしゃいました。

これは、事実です。つまり脱線はするけれども、非常にリアルな、現在進行形をつかまえているものが現実に絵から出てきますから、いいか悪いかということは別として、あるいは情報量が多いか少ないかということは別にしますと、そういうある種の真実というものをカメラがちゃんとつかんでいる。この辺がおもしろいと思いました。

情報の量が非常に限定されるのは、ドキュメントのスタイルだと思います。特に、ナレーションにたよった型はそんな感じがします。つまり論理だとか解説が先行するわけではない。内容は、本に書かれていますように宗教史、宗教理論といろんなことを説明しなければいけないけれども、しかし、そういう理論がまず先行して、ドキュメントを構成することはできない。

ディレクターの中にいったん入れてしまっ、かき回して消化させて、自分なりに出てきたものをつかむ以外に方法はないんだということになりますと、あれもこれも入れるという器ではなくなってしまうわけです。非常に部分的に偏った、しかし、偏ってはいるけれども、ある種の拡大がある。多少変形かもしれません。そういう性格がある器であるということを感じました。

したがって、いろんな器があって、いろんな形があって、いろんなものが入るわけです。たくさん入るのものもあるし、少ししか入らないものもある。それから、非常にこくのあるものもあるでしょうし、淡泊なものもあるかもしれない。いろんなものがあるわけだから、いろんな方法で番組をつくれればいいわけで、その目的だとか、そういうものに沿ってつくっていけばいいんですけれども、ただ、これは今後の討論それから、あしたの討論につながると思うんですが、テレビ・メディアにのっけるという視点を忘れてはいけないだろうと思います。

つまり、テレビの一番得意な分野をできるだけ利用した方がいい。それから、あした話にでる印刷教材の得意なものは一体何だろうか、両方の得意へものが合体できるのかできないのか、そういう視点で、今日から明日への話が続けばいいなというふうに思っております。

司会 ここではいま見た印象が薄れないうちに、皆様のご意見なりご質問なりがあれば、どうぞ。

先生自身がここで学生に理解させようとしていることについて、現場とか映像とかいうものが一体プラスになっているのか。

西田（木更津高専）前段の方で、スタジオと、教室の状況と、現場と、いろいろな要素を取りまぜてやられたんですが、ただ、私わかりませんのは、柳川先生のご講義で、

私は、それは先生のお話の中でいわれようとしていることの、われわれの聞く側のイマジネーションを全部遮断してしまうような感じがいたします。むしろこれをラジオの番組としてつくった場合に、それとこ

のような6つの形式との比較もあわせてや  
ってください、講師のご趣旨が一体どれ  
で最も生きると評価されるのか。その評価  
は非常にむずかしいと思いますけれども試  
してみただけでないか。

一番思いますのは、見事なナレーターと  
見事な映像を出されたあそこでは、完全に  
教師が不在になってしまつて、先生のご講  
義の中から知的な要素というものが全部消  
滅してしまつて、あれは学問ではないと私  
は思います。

岡田（駒沢大学）いまのご質問に関連して。

実は私、「記号と人間」の論理学のとき  
には全然映像を拝見しないで、半ばうつら  
うつらしながら伺ったんです。それが、非  
常によくわかった。これ、いまのご質問の、  
ラジオでやった場合とテレビでやった場合  
との比較でというようなお話とつながって  
いくと思います。

大内（筑波大学）先ほどラジオへの言及  
がございましたけれども、きょう拝見した  
6つの形式のほかに、ドキュメンタリーの

発展としてのドキュメンタリー・ドラマと  
完全なドラマというものが考えられると思  
うのです。

ラジオならば、そういうドキュメンタリ  
ー・ドラマなり、純粋な意味でのドラマと  
いうものも考えられてしかるべきだと思い  
ます。そうなりますと、きょうのドキュメ  
ントの2型、ナレーターによると教師不在  
になっていまいというふうなお話もありま  
したけれど、あるいは教師をどこかに出す  
か、全然出さないかというような分す方も  
入ってくると思うのです。テレビの方式で  
すと、たとえばダンテの『神曲』などに題  
材をとったドラマをつくるには、ちょっと  
やそっとのお金ではできないと思うのです。  
しかし、音声だけの工夫ならば、お金はそ  
れほどものすごくかけなくてもラジオによ  
っては可能だと思うのです。

そういう配慮も、実験番組をつくる段階  
ではあつてしかるべきではなかったかと考  
えますので、そこらのお考え、実験・企画  
の段階においての構想などを伺えたら幸い  
だと思います。